

キーコンピテンシーを中心に据えた習得から探求への 学習マネジメントの研究開発（2）

桑田 一也 大橋美代子 泉谷 正則 向井さゆり
三村 真弓 濱本 恵康

1. はじめに

流行語にもなった「無縁社会」。まさに地域や家族の絆が薄れていることを象徴するかのようだ。学校では、いじめ、暴力、キレるといった問題行動が後をたたない。仲間と交わることで、他人や集団との距離、つまり人間関係の距離を身につけ、その土台が自然に育つということなど今の社会では望みにくい。これらの現象は、他者との人間関係をうまく築けない子どもが多く存在することに他ならない。「人とかかかわると楽しいことがある」という感覚、つまり「他人とかかかわりたいという意欲」に欠落していると考えられる。相手とコミュニケーションしたいと思わなければ、いくら他者とかかわるスキルをつけようとしても役には立たない。そうした現状を打破することが学校現場に望まれていることは承知している。では、そういうニーズに応えるための空間が学校には存在するのか。私たちは、他者と交わり人間関係を築くためのキャパシティは用意されていると考える。なぜなら学校には、同年齢だけではなく異年齢の様々な子どもがおり、実体験の機会を提供することができる場であると考えているからである。さらには附属三原は、三校種が一体となった学園であり、その可能性を可視できる場所である。この根拠から、附属三原で社会生活を営む上での「他者とのコミュニケーションを図る」ための根幹を育みながら実体験を通して学力を育む取り組みを行うことは、一種の使命であると考えている。

では音楽科に視点を移すとすれば、人間関係力を育みながら、教科独自の学力を身につけさせる方策をどう模索すればよいのだろうか。ひとつには、異学年異校種という学習を組みやすい環境を活かして、長期に渡り行ってきた合同授業の研究をより深化したものに発展させることの必要性を感じている。単学年で身につけた音楽的学力を合同授業の場で合わせたときにど

のような成果を生み出すのか。「音楽」に対する価値感情を高めるとともに「豊かな情操」を養うことはもとより、発達段階に応じた「お互いのよさ」を認め合うことに主眼をおいた研究を行いたいと考えている。さらに、今学習指導要領改訂で問われている授業の中に「思考・判断」の場を組み込むことで、熟考しながらも音楽を感受するという側面を忘れてはならないと心得ている。

そこで本研究は、現代社会のニーズ、学習指導要領改訂の重点項目、また今年度新たに本学園の研究主題に沿った力「創造的思考力」に着目しながら音楽的な力をつけていきたいと取り組んでいく。とりわけ「創作分野」の研究を進めることは、子どもの「創造的思考力」を活用するであろうと仮説を立てるに値する。そして、既習事項をベースに「活用する能力」＝「キーコンピテンシー」を主軸にしながら、音楽科における習得・活用・探求の学習マネジメントサイクルを研究開発することを本研究の目的とする。

2. 「活用能力」（＝キーコンピテンシー）育成と「習得」「探求」の連続性について

今学習指導要領の改訂では「教えるべき知識はきちんと教え、知識を教えるだけにとどまらない教育が必要である」との見方が柱となっている。これは、「学力を知識・技能だけにとどめず、読解力、論述力、討論力、批判的思考力、問題解決力、追求力、さらには学習意欲やコミュニケーション力など「PISA型学力」でいわれている現実の生活場面で生きて働く力を内包する力としてとらえる。」¹⁾ という、認知心理学に依拠した考え方であろう。この考え方は、中教審の報告の中には次のように表現されている。「知識・技能の習得と考える力の育成との関係を明確にする必要がある。まず、①基礎的・基本的な知識・技能を実際に活

用する力の育成を重視する。②こうした理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する。さらに、③この活用する力を基礎として、実際に探求する活動を行うことで、自ら学び自ら考えを高めることが必要である。これらは、決して一つの方向に進むだけでなく、相互に関連しあって力を伸ばしていくものと考えられる。」²⁾つまり、これからの取り組みの方向性としては、学力そのものを狭義の意味でとらえるのではなく、学習のマネジメントサイクルを確立することで、実社会・実生活の中で生きて働く力として育成されるべきだと言えよう。

そこで着目したいのが、PISAの依拠した「キーコンピテンシー（主要能力）」という概念である。この能力概念は次のように定義されている。「単なる知識や技能だけでなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」³⁾である。「コンピテンシー」をもう少し詳細に説明すると、「課題状況に応じて自分の持つ複数のスキルを使い分けて臨機応変に対処できる能力であり、また、他者の持つスキルを含めて、その状況に存在するリソースを最大限活用して課題を解決していく能力」⁴⁾と言える。

この「キーコンピテンシー」は、活用能力といっても「応用力」に近い、「総合的な学習の時間」のねらう能力である「生きる力」の中核にある「問題解決あるいは課題解決の能力」に近いものと考えられる。つまり、PISAが求めている「活用能力」は、「探求型」の学習に「習得型」の学習結果をつなぐ媒介的な役割を負うものではなく、むしろ「探求型」学習が最終的に育成しようと狙っているものである。

また、今学習指導要領で問われている「思考力・判断力・表現力等を育成する」ためには「知識・技能を働かせて＝活用して思考する」ことが重要であり、これは探求する学習活動であると言えるが、それを教科学力育成のために置き換える学習としてとらえることも可能なのではないかと考える。そのため、学習サイクルを確立し、知識・技能を習得させ、その力を活用し思考させることで、教科学力を獲得させるモデルを考えることができれば、非常に有意義なことである。

3. 本研究が目的とする「活用能力」（＝キーコンピテンシー）を生かした「習得」から「探求」までの音楽科の学習モデルについて

音楽科の中でまず大切なことは、音・音楽を「知覚・感受」することができることである。これは、今学習指導要領で新設された「共通事項」に明示されている「音楽を形づくっている要素としての音（音色な

ど）、音と音との時間的な関係（リズム、速度など）、連なりや織りなす関係（旋律やテクスチャなど）、音量の変化（強弱など）、音楽の組み立て方（形式や構成など）」などの諸要素を意識して感じ取ることである。また、その音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す音楽の「特質」「雰囲気」「音や音楽のよさ、美しさ」を価値あるものとして感じ取ることが必要となってくる。まずこれらを音楽的な基礎的事項、つまり「リソース」として子どもの内面にインプットすることである。

次に、音を通してインプットしたリソースをベースにしてアウトプットするための「思考・判断」する段階に進む。「知覚・感受」して内面で醸成させた音・音楽を今度は子どもが自分自身で表現するために、個人で、または他者ととも熟考するのである。それは、音・音楽を媒介にして、または言葉を介して、個人では内面と、他者とは意思疎通のためにコミュニケーションを通して判断していくのである。その際、感受・知覚の段階で習得した事項を活用するように促す。共通事項と関連させながら学んだ諸要素と照らし合わせたり、自分の感性を生かしたりしながらアイデアを出し、自分の思いに向かって思考錯誤する。このプロセスがキーコンピテンシー（＝活用能力）を用いた学習になる。試行錯誤する際には、思考するための練り合いを通して、音楽を表現するための技能を身につけていくと考える。

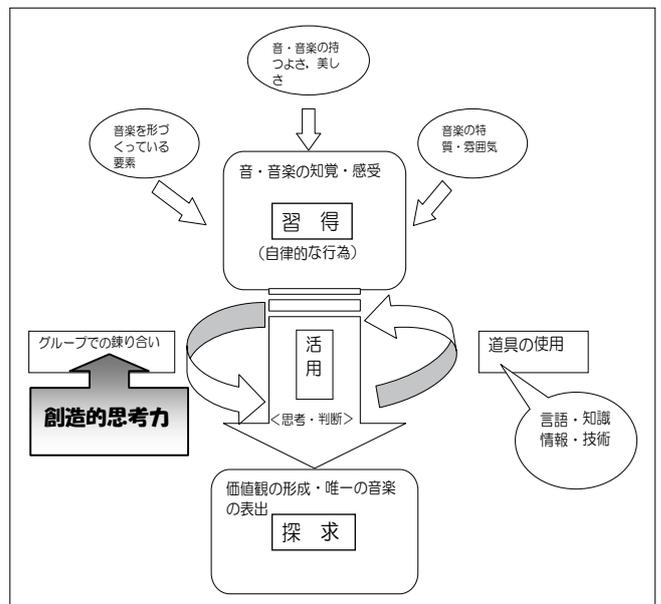


図1 習得から探求までの音楽科学習マネジメント

最終的には、子どもが熟考した表現をアウトプットする段階に入る。それは、上記で触れた「探求」という段階である。この段階では、「思考・判断」したことを「熟考」して、表現することとなる。このプロセ

スについて興味深いことが次のように記されている。「探求型の学びの過程では、知識や技能を活用することによって習得することが期待されている。しかしそれはあくまでも副産物で、探求型の学びを行う主目的は、「価値観」の形成である。したがって、かりに知識・技能が習得されても、「価値観」に変化が起らなければ、目標達成したことにならない。」⁶⁾つまり、子どもが習得した知識・技能を活用して表現した音楽は唯一のものであり、またそうなるように教師は支援しなければならない。また、相手があってこそ音楽する価値が高まることが予想されるわけで、他者を巻き込んで感動、満足感を得ることができるよう場の設定をする必要があろう。今、説明した「探求」は「活用・応用力」、つまり問いを「追求」することで新たな発見を行う過程について説いたものである。もう一方の、「実生活・実社会で生きて働く力」を育成する「探求力」についても上記のとおりであるが、これを音楽という教科内で試行するには、題材開発をすることが必要となってくると思われる。

このようにして、「習得」「活用」「探求」の学習のマネジメントサイクルについて説明してきたわけだが、これらは決して途切れることはなく連続性を伴って学習を進めることで功を奏することとなる。図1は、以上の過程をまとめた概念図である。

4. 昨年度の研究成果と課題

昨年度は、習得から探求までの学習マネジメントサイクルを開発するために、小中合同授業という方策を取り入れて試行した。習得サイクルでは、単独の授業で基礎基本を身につけ、合同授業で基礎基本を定着させ、さらには、お互いに身につけたことを活用させることで螺旋的に音楽的思考が働くように導いた。そして、探求サイクルを表現の錬り合いとその表出というところに着目して、相乗効果をねらって小中合同で演奏をさせたところがポイントであった。結果的には、合同授業を仕組むことで活用サイクルまでは結果を導くことができたと思われるが、指導者側の演奏における錬り合いの支援が不足し、双方向のコミュニケーションが未熟でお互いを磨き合うところまで到達できなかった。また、子どもの五感を十分に発揮させることで感性を揺さぶるだけの学習に発展したのか疑問が残るところもあるが、新学習指導要領による共通事項の定着を図ることの重要性や創作分野に着目して小中合同で学習を深めることには一定の成果を示すことができたのではないかと考える。

5. 本年度の具体的取り組み

(1) 創造的思考力の育成

今年度は昨年度の課題をうけ、学習のマネジメントサイクルの中に、「創造的思考力」育成のプロセスを組み入れることで、より子どもたちが他者とかかわり合い、お互いに有する技能や表現を磨き合うことをねらいとすることにした。(図1 習得から探求までの音楽科学習マネジメント)

さらに「創造的思考力」を育成することは、異なる音楽的背景、考えや感じ方、発達段階をもった集団のなかで、既習の「音楽活動の基礎的な能力」を活用しながら、音楽的な問題を発見し、その解決方法を他者に伝え他者のそれを受け入れ、様々な情報の中から必要な情報を選択し、試行錯誤しながら1つの音楽を創りだしていくことができると考える。

「音楽活動の基礎的な能力」とは、音楽を形づくっている要素についての知覚と感受及びそれらを表現するための技能である。つまり、「この旋律は波が押しよせてくるように表現したいと感じ(感受)、音量がだんだん強くなる状態を意識し聴きわけることができ(知覚)、息のスピードをだんだん速くするよう調整しながら声や楽器でそれを表現していくことができる」といった能力である。

(2) 育成する方法

各学級・学年の発達段階に応じて、「音楽活動の基礎的な能力」を計画的に習得させていく。その際、リズムをドリル的に習得させたり、リコーダーの音階練習を繰り返したりといった個々人の学習に留まらないよう、小集団及び大集団による学習形態を取り入れ、自らが音楽について知覚・感受したことや自らのもつ技能をアイデアとして他者に伝え、他者のそれらを理解しながら、課題解決に向けて必要な情報を選択し、音楽的なアイデアの拡散と収束を繰り返すような創造的思考の場を設定していく。さらに、より高次の創造的思考力、人間関係力を育成できるよう、異学年による学習形態を活かした学習形態を適宜取り入れる。

6. 授業の実際

(1) 題材名「いっしょにつくろう～春夏秋冬～」

3年生と7年生の合同授業を中心として

1) 学習形態

・3年生 4名, 7年生 4名 合計8名の10グループ構成にする。

2) 学習内容

第1次では、習得の段階として、創作に必要な基礎的な能力を習得させる。3年生では「音色」について、

7年生では「音楽の要素（強弱、速さ、長短、音高、音の重なり）」「音符と休符」「リズム」「拍子」の学習を行う。

第2・第3次では、既習内容を活用する段階として、「春夏秋冬」を音と旋律とで表現する音楽を創作する。3年生4名・7年生4名によるグループで、季節のイメージを膨らませ、リズムや旋律や速さなどどのような音楽にするかを考える。7年生はミュージックキューブを利用してそれに合った旋律を創作する。7年生は創作した旋律を3年生に聴かせその旋律についての説明を伝え、3年生はどのような音をつけるかを考える。3・7年生のグループで旋律と音を合わせてみて、よりイメージに合った音楽にするために意見を交流し、演奏して試しながら1つの作品にしていく。発表会では、相互評価により自らの作品の良さや、新たな問題を発見できるようにする。

第4次では、発表会を行い、互いの作品を見合い相互評価することで、より自らの作品の良さや、新たな問題を発見できるようにする。

3) 小中合同授業を行うことのメリット

【3年生】

- ・音色についてのアドバイスをしてもらえらる。(強弱、音の出し方など表現の工夫)
- ・7年生とともに学習することで、豊かな響きで表現活動ができる。(アルトリコーダーでの旋律)
- ・練り合いの中で、3年生だけでは気づかない音楽的要素について知ることができる。

【7年生】

- ・3年生にアイデアを伝えたり、アドバイスをすることを通して、習得したことをより定着させることができる。
- ・7年生の考え方だけでなく、3年生の考えや思いを受け入れながら拡散・収束することを通して、意見を広げたりまとめたりする力を身につけることができる。

(2) 研究の仮説

3年生と7年生が独自に基礎基本の習得を行いながら、身につけた基礎基本の能力を合同で活用することにより、より深く探求した音楽づくりを行うことができるだろう。

(3) 3年生と7年生の合同授業の様子

【第3学年】

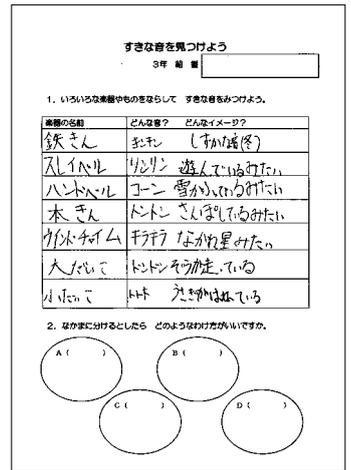
第1次 楽器や物から出る音の特徴や素材による音色の違いを感じ取ろう (習得)

ここでの3年生の「習得」にあたる学習内容は、音

に対して敏感になり、身の回りの物や楽器から出る音を聴いたり、素材による音の違いを探ったりすることを通して、音の特徴や音色の違いを感じ取らせることである。

そこでまず、音楽室の楽器を触ったり、音を出したりしながらその音色の特徴をワークシートにまとめていった。子どもたちは、興味のある楽器を自由に触り、マレットを変えながらいろいろ音を出していた。授業では打楽器中心だったため、木琴や鉄琴、ウインドチャイムなど、楽しみながら活動していた。

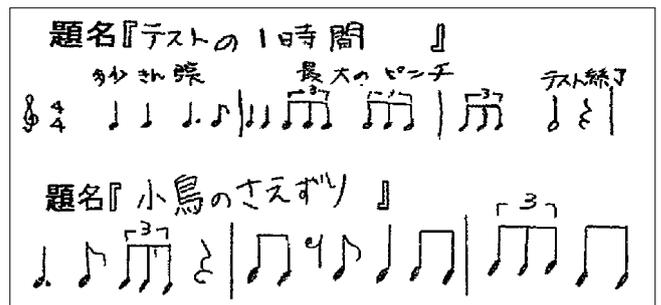
次時では、素材によって音色の特徴にどのような変化があるのかを楽器の仲間わけをしながら考えさせていった。



【音さがしのワークシート】

【第7学年】

第1次 音楽を構成する要素について学び、表現や創作に活用しよう (習得)



【生徒の作品】

ここでの7年生の学習内容は、音楽が何でつくられているのかについて気づかせ、それを表現や創作に活かしていけるようにすることである。旋律の創作に向けて、「音符及び休符」「リズム」「拍子」についての学習を積み重ねた。記号や音符を覚えたりリズムカードで手拍子をしたりといった学習だけでなく、グループで話し合いながら合唱表現を工夫したり、グループ

でアイデアを出しながらイメージに合ったリズムを創作したりした。生徒は、自分の考えや感じ方を表現することを楽しんでいった。

【合同授業】

第2次 3・7年で、自分たちの表現したい「春夏秋冬」のイメージをもとう（活用）

〈イメージマップを通して表現したいものを共有する〉

本時では、3・7年が初めての顔合わせを行った。ペア学年として共に活動してきた学年だけに、久しぶりに笑顔の再会だった。緊張はしていたものの、7年生がリードし、イメージマップを完成させた。イメージマップをともに作成することを通して、8人のメンバーの思いやつくりたい季節についての意見を互いに交流することができた。様々な考えを伝え合い、最終的には表現したい季節を絞り込み、イメージを共有するという「拡散・収束」を行う創造的思考力育成の場になった。



互いの意見を出し合いながらイメージを共有している場面

7年生は、イメージマップを作成しながらも、「季節・拍子・速さ・リズム」など、今後の旋律づくりの元になる要素について簡単にまとめていった。

第3次 互いの意見を交流し合い、よりイメージに合った音楽にしよう（活用）

〈お互いの思いや考えを交流したり、音で確かめたりしながら音楽をつくっていく〉

ここでは、実際にイメージした音楽を創作していく学習である。

7年生は、イメージマップを元にしながら、ミュージックキューブ（音楽作成ソフト）で旋律を創作した。その際、確認したことは次の3点である。

・拍子やリズムなど既習内容を使いながら、イメージに合った旋律をつくる。

- ・旋律に3年生が打楽器をつける。
- ・アルトリコーダーとキーボードで演奏する。

創作した旋律は、7年生が題名と工夫点を3年生に伝え、ミュージックキューブによる演奏で発表した。

3年生はその発表を元にしながら、旋律に合う楽器を選び、音色やリズムを考えていった。

次に、合同で旋律と音を合わせ、演奏をしてみた。3年生は7年生にイメージしている音色やリズムを「こう叩きたい」と伝え、7年生はそれをしっかり理解しながら、強弱、各楽器の音量バランス、リズムや



【児童・生徒の作品例 題名『夏休みと春休み』】



実際に旋律と音を合わせながら練習している様子

旋律と音とのタイミングなどについて改善点を話し合い、音楽を完成させていった。

最終的な楽譜を完成させて、発表に向けて演奏の質を高めていった。

楽譜に見られるように、話し合いや練習の過程では、既習内容である強弱やリズムなどの言葉のやりとりが活発にあり、学習の深まりが見られた。また、児童・生徒は異学年で一つの音楽を創作し演奏するということの難しさを感じるとともに、それを乗り越えるための方法を学び、達成感を感じることができた。

[3年生のふりかえりより]

- ・自分たち3年生だけでは考えつかないことを言ってくれたり、アドバイスをしてくれたりして3年生の授業だけではできない事ができてよかったです。7年生さんは話しやすくいろいろな事が聞けて良かったと思います。
- ・はじめのころはあまりちゃんと合わなかったし、音もあいまいだったけど、7年生やチームのなかまと話し合ったり教えてもらったりして、今は完璧に近づいてきたのでよかったです。7年生がリズムをとりながら教えてくれたのでうれしかったです。
- ・今日は最後の練習だったけど、練習をかさねていくうちに上手になり、音とせんりつが合うようになったのでうれしかったです。次はいよいよ本番だけど今までよりも良い発表になるようがんばります。

7. 成果と課題

音楽科学習マネジメントサイクルにおける習得と活用に焦点を当て、創作領域におけるひとつの学習指導例を実践検証したが、次のような成果があった。

- ① 音楽的な基礎的事項の習得と活用を計画・実践することができた。新学習指導要領で新設された「共通事項」について、3年生では音色、7年生では拍子・リズム・速度・強弱について計画的にその習得を積み重ねたことにより、異学年で音楽を創作する過程において活発に意見の交流ができ、各学年で学習した内容をさらに深めていくことができた。創作の過程において、指導者が作品例を演奏し、既習内容を具体的にどのように創作に活かしていくかを説明したことも話し合いを活性化することに繋がった。

- ② 異学年で活動する時のコミュニケーションの取り方、その大切さを学ぶことができた。楽しくイメージマップをつくったりといったコミュニケーションを取り易くする為の配慮もしたが、「3年生は7年生の話をしっかり聞く」とか「3年生は自分がペア学年の幼稚園さんに教えられるようにならんといけんのよ」などのコミュニケーションの取り方そのものを指導する場面も必要になった。活動が上手いかないグループでは7年生を我慢強く励ますことも必要であった。しかし、それだけに、演奏が上手く行った時の達成感も大きく、今後の学習へと繋がる活動にすることができた。

以上の成果から、本実践は、異学年交流を効果的にカリキュラムに取り入れるひとつの実践例となった。このような実践を積み重ねることにより、音楽科のカリキュラムを再考していくことが今後の課題である。

8. おわりに

今回の研究は、本テーマの2年次であったが、昨年度の課題を生かし、練り合う力やコミュニケーション能力を高めつつ、異学年での学習形態を活用し、習得・活用に焦点を当てた単元を開発することができた。創作の領域は、音楽科の中でも今後さらに注目を集める分野であると考えられる。そこに、「習得」「活用」「探求」の学習マネジメントサイクルを組み込むことで、着実に「生きる力」として定着させていく大きな一歩となった。しかし、これらは決して途切れることなく連続性を伴って学習を進めることで功を奏することとなるため、次年度は、音楽科のカリキュラムや評価方法について作成していく。

引用（参考）文献

- 1) 市川伸一 (2004) 『学ぶ意欲とスキルを育てる』小学館 p.19 表1. 学力のとらえ方
- 2) 中教審審議経過報告 (2006) p.16
- 3) 中教審答申 (2006) p.9 脚注
- 4) ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルザニク (2006) 『キーコンピテンシー』 明石書店 p.196
- 5) 市川 力 (2009) 『探求する力』 知の探求社. p.218
- 6) 同前書, p.194